



フィリピンの不思議な力

堀 芳枝 / ほり・よしえ
恵泉女学園大学 人間社会学部 国際社会学科 准教授

22年も前になる大学生の頃、フィリピンのミンダナオ島でワークキャンプに参加して、1ヶ月ほど民家にお世話になりながら、バスケットボールコート作りを手伝った。暑いので作業はほとんど男子に任せて、毎日たくさん喋って、昼寝して、おやつ食べて、夕方には太陽が沈むまで海で泳いで、8時には寝た。当時の私は一人暮らしの大学生。それなりに多感で、色々あって、疲れていたのかもしれない。帰国する頃には真っ黒に日焼けしていたが、その反対に、気持ちは茶色い皮がむけた白いたまねぎのようにすっきりして、元気になっていた。

この2月、恵泉の学生を連れてネグロス島でフィールド・スタディを実施した。テーマはフェアトレード、出稼ぎ女性や日比国際児で、APLAの大橋成子さんとその家族、BGA、エスペランサの村人やラーリーなど、『ハリーナ』でおなじみの人びとにお世話になった。大橋さんの率直な語りとラーリーのワークショップと民泊のおかげで、学生たちも互いに打解け、声を出して笑うようになった。フ

ィリピンの人びとが他者に対してオープンで、時にジョークを交えて話しかけ、配慮してくれるので、私たちの心がほぐれるというのは、昔も今も同じだった。ネグロスが抱える問題を知るとも大事だが、私はこのフィリピンの不思議な力にあやかり、大橋さんがよく言う「心の筋肉運動」をすることや、国籍や性別など関係なく、「平たく」人びとと向き合せて、彼らの話を傾けることこそ重要だと思っている。そこを軸にして社会の問題や自分の生き方を考えれば、様々な情報に流されることなく、権力に絡み取られることもなく、シンプルでブレない、メゲない生き方ができると思うからだ。

私も学生から「先生は大学の研究室や他の国にいる時よりも、ずっと楽しそうだった」と指摘され、改めてフィリピンの良さについて考え、自分自身を見直す機会となった。恵泉のフィールドスタディに協力していただいたAPLAと大橋さんに感謝です。

（注）BGA：バランゴンバナナ生産者協会

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 08 2010.05.01

02	Relay Essay ポコポコ⑧ フィリピンの不思議な力◎堀 芳枝
03	【特集】食をつくりなおす “共に食べる”場づくりからの出発 牛井安売り合戦に見るデフレスバイラル―こうして貧困は地球規模化する◎大野和興 フードバンクの現場から◎吉澤真満子 生ゴミの堆肥化から地域循環をつくる◎菅野芳秀
08	【Topics】インドネシアで石けんセミナーを終えて◎大嶋朝香 こだわり続けて半世紀、村上園のお茶づくり◎松田麻衣子
10	【Column】しらかべ便り② 一村が 白鳥帰る 声の中◎新野祐子 むらさき便り⑧ クスクスを作る難民キャンプの女たち◎大野和興 まだまだ韓流② 韓国で新しい人生を拓く朝鮮族の少女の物語『19歳の純情』◎中川 緑 Have you ever seen the Cinema?② 『ウェールズの山』◎重政栄一郎
12	撮っておきアジア⑧ インド、ラクナウ、バラナシ◎藤本香緒里
13	APLA生活⑧ 大学で通販生活◎阿部 環
14	【Voice from APLA partners】【フィリピンより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)の開所式が行われました。【東ティモールより】農村ワークショップの実施地を訪問
15	事務局便り

表紙のことば

「紅型」は、木綿や麻、ときには絹にほどこす沖縄の伝統染色で、700～800年前に始まったといわれています。その鮮やかさには目

を見張るものがあります。昔は琉球王府の婦人の礼装や神事の礼装に用いられ、また地位の違いで地色や模様の大きさが異なっていたようです。先の沖縄戦によって壊滅的な事態になりましたが、関係者の努力で復活し、今では沖縄の代表的な物産になっています。

私が紅型に出会ったのは、50年近く前、母が紅型を覚えて自宅に染めていたときでした。紅型の染め方は型紙を使用するものとそうでないものがありますが、母は型紙を使う方法でした。図案を鋭い小刀で型彫りをして型紙を作るのですが、その型彫りが私の小遣い稼ぎでした。私が彫った型紙を用いて母が鮮やかに染め上げた布が、アルバムの表紙や草履になるのを誇りに思ったものです。(秋山真良)

特集

食をつくりなおす 共に食べる場づくりからの出発

食卓という言葉がなんだか懐かしく響く。職を奪われ、住まいを失い、家庭が壊れ、人びとは共に食を囲む場をなくしてしまっただ。バラバラに分断され、街を浮遊する群衆。エサ化した食への日本の象徴を私たちは安売り競争の先頭を走る牛井の現場に見つけた。食をめぐる荒涼とした風景が広がる中で、私たちは「もう一つの食卓」をつくらうと活動する人びとの動きも見つけた。むらとまち、人と土をつなぐ農村の運動、街で浮遊する人びとに「共に食べる」場をつくらうと苦闘する都市の運動である。食をめぐる三つの現場から、今この列島を覆う荒廃と希望をお送りする。

牛井安売り合戦に見る デフレスバイラル こうして貧困は地球規模化する

大野和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集長

4月11日の「よみうり時事川柳」を読んでいて「うまいー」と思わずうなった。「牛井はそのうちタダになるらしい」という句である。作者は遊魚亭釣楽という人の川柳の通り、牛井値下げ競

争は底なしの様相を見せており、いまやデフレスバイラルの典型ともいえそうだが。牛井を例に、今、問題となっているデフレスバイラルの実相と貧困の拡大を考えてみる。

牛井御三家が値下げ合戦

牛井といえば、吉野家、すき家、松屋が御三家。昨年12月にすき家が業界最安値の280円牛井を売

り出した。それに松屋が対抗して320円へと対抗値下げで応じた。だがこの時点では吉野家は定価380円を死守、この結果業績は大きく下落した。客が来なくなったのだ。

4月8日に吉野家ホールディングスが発表した2009年8月中旬連結決算は、最終損益が3億円の赤字(前年同期は5億円の赤字)と大幅赤字を計上している。赤字の大きな要因は、吉野家の既存店売上高が4%減少したことにある。本業の儲けを示す営業利益は88.4%減の2億円、経常利益は83.7%減の4億円と大幅な減益だった。つまりかねた吉野家は今年に入ってから一週間限定で通常価格380円の牛井並盛を270円に値下げすると発表した。これに対して松屋はすかさず、やはり期間限定で一杯250円と70円値下げを発表、すき家も30円値下げで250円を打ち出した。必

死の思いで打ち出した吉野家の業界最安値2日天下だった。これはいづれも期間限定なのだが、それだけのおさまらず、いよいよこれから値下げ競争が激しくなるというのがもっぱらの見方だ。そこで

冒頭紹介した川柳になるのである。「そのうちタダになるぞ」。

しわざはいつに

安売り合戦は、どこかにそのつけを回さないと続かない。つけは常に弱い側にまわされる。安売り企業で働く労働者と、原材料などを納入する生産者・納入業者である。

牛井チェーンすき家がやっていることはその典型的な例だ。すき家を展開しているのは外食大手の株式会社ゼンショー。東証一部上場の大企業だが、働いている従業員に時間外手当を払わないということでも有名な会社である。

個人加盟の労働組合、首都圏青年ユニオンは、組合員たちの要求である残業代支払いなどの点についてゼンショーに対し団体交渉を要求してきている。しかしゼンショーは、2007年2月以降、団体交渉を拒否している。拒否の理由は、従業員とすき家との間には雇用契約はなく、あるのは請負契約なのだから時間外手当を支払う必要はないという奇妙なものだった。請負契約あるいは業務委託契約ということになる労働法は適

用されない。すき家のアルバイト従業員は一人親方としてゼンショーと契約して飯を盛り、牛丼をその上にかけて、レジを打ち、店の掃除をしていることになる。時間外で働くのはそのアルバイトの勝手であり、仕事が遅いからそうなるのだ、と言わんばかりの主張である。

首都圏青年ユニオンは、ゼンショーの団交拒否に対し、2007年6月に東京都労働委員会に救済を申し立てた。仙台市内のすき家店舗で働く女性アルバイト(むら組)組合員の未払い残業代などの支払いを求めてゼンショーに団体交渉を申し込んだが拒否された、というのがその理由だ。都労働委員会は2009年11月、ゼンショーに対し「団交に応じるように」との命令書を出した。「アルバイトは会社のマニュアルに従って働き、職務はあらかじめ決められたシフトで行われ、時給で賃金を得ている労働者に当たるとしている。」
2008年4月8日、首都圏青年ユニオンの組合員でもある仙台のすき家アルバイト従業員3名が、仙台労働基準監督署に対して、労働基準法の定める時間外割増賃金(残業代)の未払いがあると、ゼンショーと代表取締役小川賢太郎氏を労働基準法違反で刑事告訴した。同年12月26日には、やはり首都圏青年ユニオンの組合員で、すき家岡谷若宮店の元アルバイト従業員が労働基準法違反(賃金未払い)の疑いで、同じくゼンショーと同社社長を告訴した。すき家は各地で残業代を支払わずにアルバイトを使っていることが明らかになったといえる。



名ばかり店長集会

ゼンショーは奇妙な報復処置に出た。残業代不払いで同社を刑事告訴した仙台市の女性店員(むら)を、店のご飯を無断で食べたなどとして、窃盗などの疑いで仙台地検に

熟れたイチゴなんて、きつと昔ながらの八百屋さんで買ったから「ちよつと傷んでいるからまけとくよ！」なんて会話に救われて、誰かの口に入っていたかもしれない。しかし、今私たちが置かれている食品流通の現場では、そんなことは許されないのが現実だ。売る人、買う人の関係性の変わりに、様々な法律や規制で私たちの食は守られている。その現実のために、本来であれば食べられるものを廃棄しなくてはならないのだ。

食品の受け取り先では
午後は、スタッフの黒澤さんと一緒に、午前中受け取った食べものを福祉施設などへ配達に行く。その日は、東京都台東区の通称山谷地域の路上生活者支援施設、在宅型医療施設、社会復帰支援施設、母子生活支援施設など、合計11ヶ所をまわった。山谷は東京23区の中でも路上生活者が多い地域ではあり、配達先の半分くらいは路上生活者支援施設だった。スーパーから大量に寄付されたパンを小分けパックにして、毎週決まった曜日に配っているという施設が2件あった。1施設につき300

刑事告訴したのだ。2009年4月のことである。読売新聞は「すき家、無断でどんぶり飯5杯食べたと店員告訴」と報じ、「店の防犯カメラで判明した」のだと書いた。報復と恫喝であることは誰の目にも明らかで、地検は当然のように不起訴とした。
世界に広がるテフレスパイラル
すき家と闘っている仙台の女性労働者の話を聞いた。残業代未払いは氷山の一角に過ぎず、働く者をモノ扱いにし、劣悪な労働条件で働かされている実態に唾然とした。こうして多くの労働者がまる

フードバンクの現場から

吉澤真満子 / よしざわ・まこ
APLA事務局長

古今、日本の食料事情について話をするとき、「日本の食料自給率がカロリーベースで40%を切った」ということが枕詞のように言われるようになった。一方、日本は「もったいない」とい

で底なしの低賃金に押し込められ、お金がないから食べるものさえ十分に買えない生活を強いられている。

その労働者に物を買わせるために、安売り合戦が始まる。ますます労働者は低賃金でこき使われ、物が買えなくなる。そこをめがけて安売りを浴びせる。日本国内では労働者の賃金引き上げや農産物の買いたたきには限界があるから、中国へ、ベトナムへ、アフリカへと大企業は買いたたきに出かける。こうして今、テフレスパイラルは世界に広がり、貧困が地球規模で拡大し、深化する。■

う言葉を持つ国なのになくさんの食べものが廃棄されているという。2008年の農林水産省の発表に基づく、日本の食品ロス(食料)は500〜900万トンにもなる(世界食料援助の総量が650万トン)。一体日本の食事情はどうなっているのか。詳しく知りたい。そのときに『フードバンク』に出会った。食品関連企業からやむなく発生してしまう規格外商品を無償で譲り受け、支援を必要とする福祉分野の

ものを必要としているところに届ける。『もったいない』と、生活に困っている人を助ける。のどちらにも偏ってはいけない。目的はシステムを社会化すること。それには関わる人の信頼関係、平等関係があったること」と代表のマジルトンさんは話す。日本で活動を始めてから、企業に向いて支援をお願いしたことはなく、常に関わる人と一緒に何ができるかを考えるという。企業は食品の寄付以外に、物流コストの寄付、例えば空いたトラックのスペースを利用して配達の協力をすることもあるとか。他にも、自家用車で帰りのついでに支援先に配達する人、ボランティア後の空いた時間を使ってボランティア後の空いた時間を使ってボランティアをする人など、無理をせず、それぞれが余ったものを提供して成り立っている。関わる人たちが作り上げていくシステム。ある意味フードバンクを通じて新しいネットワークが形成されているようにも感じる。

「心ある部分をなくすと、食べものは単なる『もの』になる」とマジルトンさん。この言葉が今でも心に残っている。豊かになつたといわれる日本ではあるが、フ

1ドバンクのようなシステムが必要とされている実態がある。そのシステムが成り立つこと自体の矛盾を私たちはどう受け止めるのか。日本人の「食」を通じて大きな課題を見た。

生ゴミの堆肥化から地域循環をつくる

菅野芳秀／かんの・よしひで
農業、アジア農民交流センター共同代表

山形県長井市。見渡す限り田んぼが広がる。3000町歩の9割が水田で米だけを作っている農家が多い。ここ十数年来、米の原価割れが続き、米生産者にとっては厳しい状態が続いている。生活を支えていた息子や嫁が稼いでくる農外収入も、昨今の経済不況で減ってきている。農業従事者の平均年齢は67歳。

十数年前でも、今ほどは酷くなかったが、農村の生活は厳しかった。そんな中でも、人に解決策を求めるのではなく、自分たちが自発的に対策を持って問題を解決したい。新しい考え方やものさしを育て、生産と消費、むらとまち、

他の作物にもいえる。違いは生産過程に堆肥を使っていたか、化学肥料を使っていたかの違いだ。人の健康、まちづくり、農業は全て土からというわけだ。

新しい地域のあり方を求めて

レインボープランは地域の循環をどう取り戻していくかということとを念頭に進められてきた。そこには、新しい生産と消費や地域のあり方が示されている。従来のように東京を大消費地として据えるのではなく、地域自給をどう作っていくか。それぞれの地域が自立し、モザイク的に組み立てなおされるのが、現在のグローバル化への対案のひとつ足り得ないか。長井市の子どもたちが食べる野菜は、隣に植わっている野菜ではなく、海外や他の地域からの野菜で、食べるものすらつながっていない。そうではなく、地域社会と農業が有機的につながる形を作り、都会とのつながり方も見直す。今時代は大きな転換期を迎えている。だからこそ、様々な可能性が大きな流れにできるかもしれない。

※このレポートは編集部で菅野さんにインタビューしたものをまとめた。

※皆さんもセカンド・ハーベストジャパンの活動に参加できます。《<http://www.2hj.org>》
注1：品質は全く問題なくまた十分に食べられるにも関わらず捨てられてしまう食品
注2：経済開発協力機構
注3：社会生活の中で、安全かつ十分に栄養のある食べものが「食糧安全に得られること」

今と未来をつないでいきたい。そんな思いを持って生み出されたのが、まちから出る生ゴミを堆肥化し、地域循環を創りだす長井市のレインボープラン。情熱を持ってこの取り組みを進めてきた菅野芳秀さんのお話をここで紹介する。

地域が一体となり作り出されたシステム

準備に8年、稼働してから10年が経つレインボープラン。はじめは市民が動き出し、地域の女性団体や商工会議所、病院、清掃事業者が一緒に取り組むことになり、そこに行政と農協が参加した。長井市は人口3万人、約5000世帯がまちに、4000世帯が周辺に住む。まちには2500ヶ所の収集所が設置され、5000世帯がそれぞれ持っていく。年間

1000トンの生ゴミが運び込まれ、畜糞ともみがらと混ぜ合わせ3ヶ月で堆肥ができる。レインボープランは生ゴミの減量化が目的ではなく、生ゴミを資源として考えて、まち、人と人、地域社会と地域農業、生産と消費の循環を創りだすシステムだ。従って、始めから産業廃棄生ゴミではなく、一軒一軒の家庭から出る生ゴミを、地域住民が毎日行動して、集めることに意味があった。11年が経過した取り組みの現在の参加率は97%ということだ。

生ゴミからできた堆肥は農協を通じて農家や市民へ販売され、田畑へ戻す。堆肥を使って栽培された野菜などは、農薬・化成肥料の使用をできるだけ抑え、逆に堆肥の使用量を定めた独自の基準を設定し、レインボー特別栽培として販売され、市内にある3ヶ所の大きなスーパーと3ヶ所の直売所で購入することができる。加工品にも利用され、お酒や納豆、豆腐などにも形を変え、市内のラーメン屋などでも野菜が使われている。

レインボープラン市民農場もあり、農家2、3名と市民約40名がNPOをつくり、2haの土地を生

ゴミ堆肥で耕す。

レインボープラン・3つの理念

レインボープランには3つの理念がある。ひとつは「2つの循環」。土から土へ、人の輪が織りなすまちとむらの循環。まちの消費者は堆肥の生産者にもなり、むらの生産者たちは堆肥の消費者になる。地域の人たちが土、農、食への参加者となる。ふたつめは「共に」。長井市にはレインボープラン推進協議会があり、市民と行政、農協の職員60名が5つのセクションを作り、レインボープランに関わる様々な決定をここでする。情報は全て公開され、議論されたことはそこで決定することになっている。目先の経済効率ではなく、50年、100年後の地域に何を残すかという視点を持って話し合う。循環型社会には欠くことのできない仕組みだ。そして最後に「土は命の源」。生ゴミ堆肥からつくり、田畑でできた野菜は人の胃袋に入る。土の弱りは、作物、人間へとつながっていく。1954年に作られていたピーマンの栄養価は2001年には38%。これは

データで見る日本の食

食料自給率

カロリーベース

食料の重さは、米、野菜、魚…どれをとっても異なります。重さが異なる全ての食料を足し合わせ計算するために、その食料に含まれるカロリーを用いて計算した自給率の値を「カロリーベース総合食料自給率」といいます。カロリーベース自給率の場合、畜産物には、それぞれの飼料自給率がかけられて計算されます。

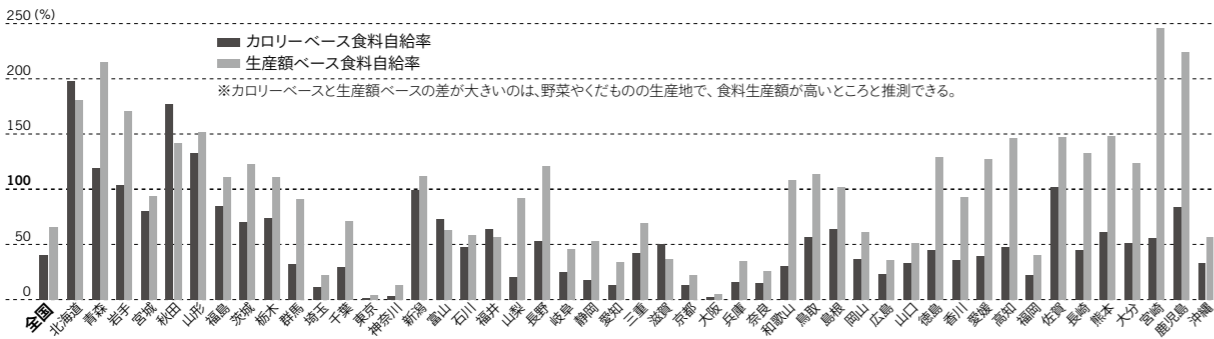
$$\text{カロリーベース食料自給率(\%)} = \frac{1人・1日あたりの産熱量}{1人・1日あたりの供給熱量} \times 100$$

生産額ベース

カロリーの代わりに、価格を用いて計算した自給率の値。比較的低カロリーであるものの、健康を維持、増進する上で重要な役割を果たす野菜やくだもの生産などがよりの確に反映されるという特徴があります。

$$\text{生産額ベース食料自給率(\%)} = \frac{\text{食料生産額}}{\text{食料消費仕向額}} \times 100$$

■平成19年度都道府県別食料自給率(概算値)



日本での食品廃棄量



インドネシアで石けんセミナーを終えて

大嶋朝香 / おおしま・あさか
フォーラム・アソシエイト 運営委員長

インドネシアで石けんセミナー？ それも日本から行って？ 研究者レベルの方ならともかく石けんを毎日使っているだけでいいの？ ということでしたが、とりあえず行ってみようと思われました。私は、生活クラブ生協組合員歴23年、順番で回ってきた支部委員の時にしゃぼん玉委員を務め、洗剤には石けんと合成洗剤があるというところを知りました。その時をきっかけに石けん派になった私。「被害者にも加害者にならない生活」といえばカッコいいのですが、石けんひとつで何でも洗えるというシンブルさ(すばらしさ)もという共同購入で自宅に届くということが幸いして、石けんを使い続けています。水環境や、人体・生態系への影響を考えるとやっぱり石けん。合成洗剤を使わない人を増やす石けん運動は日本だけでなく海を隔てたアジアの人たちとも共通の課題であり活動です。「いざ行かん」というわけでAPLA理事の廣瀬康代さんと、成田



バンゴン村でのセミナー風景

を飛び立ちめざしたのはエコシリンプ加工場のATINA社があるスラバヤです。次の日からATINA社の皆さんとの連携・協力のもと、3日間で4回のセミナーがスタートしました。

初の石けんセミナー in インドネシア

初日は、エコシリンプの養殖池地帯にあるバンゴン村でのセミナー。日本人のおばちゃんたちが来たこと生産者の奥さんや子どもたち30人が集まりました。アジアのおばちゃん同士というのは、言葉は違えど気持ちは同じで、違和感もないというのが不思議です。皆さん真面目に聞いてくださり、特に

子どものアレルギーや皮膚への影響には若いお母さんの関心が集まりました。「漂白作用のある洗剤があるが、それは本当に白くなるのか」という質問もありましたが、健康な皮膚が何よりという事で合意されました。

翌日はATINA社でのセミナー。恐らく従業員の皆さんは何度も石けん学習会を行っているのでしょう。石けんのよさも合成洗剤の怖さも知っていると印象を受けました。煮洗による汚れ落としの実演やATINA社の石けん製造担当者の熱い話、小魚の実験などが次々と行われ、女性社員の方が自分の石けんや環境への配慮について語るなど盛り上がりしました。

最終日にはATINA社近くにある私立中学校を訪問。新陳代謝の激しい中学生に、これから大人になり父や母になるだろうという視点で、化学物質が体に与える影響を話し、健康に暮らすためには自分なりの判断力をもって選択していくことの大切さを伝えました。「合成洗剤のような合成化学物質が多く生産されるようになった理由は？」など難しい質問がいくつも出され、こちらもタジタジでした。

午後は、プングル村婦人会を訪問。環境問題は地球に住む私たち全員の問題であり、責任なので、これからも連化学肥料で人の都合の良いように無理やり生育させられていることも。一つの頃からか、コンビニや自動販売機に多種類のペットボトル入りお茶が並ぶようになった。日本人はこんなにもお茶が好きだったんだなど一人納得してから随分と久しい。以来、季節や含有物なんかのちょっとした差で入れ替わり立ち代りに新商品が登場している。風味に加えてパッケージやメーカー、CMといった情報も売れ行きを左右し、残るのは当然売れ筋商品。そして次第に淘汰されていき、多くの人ととって、お茶と言えばペットボトルのお茶になってしまった。振り返れば、似たような味のお茶をズラリと並べてこだわりの持っているように見せかけて、人びとはその実お茶そのものに対して無頓着すぎるように感じる。

山のお茶である村上園のお茶を煎れると、香りのよい澄んだきれいな緑黄色でどこか甘みのあるお茶を味わえる。ほっとする味だ。これが本来のお茶の味だと村上さんは教えてくれた。対して農業や化学肥料を使ったお茶は、まろやかではあるがどろっと濃く渋い。自然を歪める栽培方法で外見はきれいに整えられても、本来のお茶の風味は完全に損なわれている。そればかりか、そのお茶を飲む人間の体にも害を残す。

それがペットボトルのお茶の正体だ。最近村上さんは、市販のお茶に慣れきった消費者からの「なぜ村上園のお茶は黄色くて薄いのか」という問い合わせになんと答えを返そうかと思案しているらしい。各人の好みは置いておくとして、本物を知らないばかりに本物を疑う舌を持ってしまい、おいしいものをおいしいと感じられなくなるのは、現在に続くペットボトル入りお茶ブームの弊害に外ならない。

無用の用でお茶づくり

4月上旬の土日、1泊2日で畑仕事の手伝いに行った。作業は草刈。「これが冬草、これが夏草。花が咲いたものは無理に刈らなくていいし、草で覆えば生育を妨げられるものもある。無用の用だよ」。大事なことは全体を見ることがと言う。真摯にいいお茶を作ることを考えている村上さんは、さながら小さな宇宙のバランスを取る調停者のようだ。その目で常に、畑で生きるものすべての相互関係を見つめている。草刈機を止めて休憩すれば、鳥の声しか聴こえなくなる。作業の間、他の畑に人の影を見ることが最後までなく、草刈入らずの見た目立派な茶畑は最早不自然にしか映らなくなっていた。■

こだわりの続けて半世紀、村上園のお茶づくり

松田麻衣子 / まつた・まいこ
APLA事務局

村上園は、静岡県清水市の山間地で茶作りをしている。無農薬の自然農法に取り組み始めたのは、昭和36年のこと。現農園主の村上倫久さんの父・国男さんが、農薬散布が原因で農家仲間を亡くし、その危険性に「農薬は絶対に使わない」と決めたことがきっかけとなった。加えて、有吉佐和子著『複合汚染』が話題を呼び、食品の安全性への関心が高まっていた時分に、神奈川県



村上さんとお茶畑

奈川県の婦人グループよりお茶の無農薬栽培を依頼されたこともその取り組みを後押しした。当時、村上さんを含め6軒の農家が自然農法に挑戦したが、無農薬のために増える病虫害の被害や除草の手間、化学肥料を使わず自然のサイクルの中でゆっくり生育させることによる収穫量の激減といった問題が壁となり、結局残ったのは村上さんだけ。それでも諦めずに試行錯誤を積み重ねた後、平成7年にBMW技術と出会ったことが転機となったという。

それは本当に「お茶好き」か？

山の上の平地に広がる茶畑を見渡せば、村上さんの畑の向こうに青々とした緑の濃い茶葉が茂る他の畑を見ることが出来る。何の知識もなければこちらの畑の方がおいしいお茶が取れそうだななんて思ってしまうが、それはまやかだ。除草剤を使えば雑草は生えない。農薬を使えば虫も寄り付かない。お茶の製造過程に農薬を洗い流す工程がないことはご存知だろうか。また、

このコーナーは「KAJA」のメンバーの方たちに交代で書いていただいています。

03

まだまだ韓流

02

中川 緑 / なかがわ・みどり
KAJA (Korean and Japan Alternative Learning) 会員



朝鮮族の訛りも可愛い少女グッカと個性豊かな登場人物が167話を彩る。

前回のテーマ国際結婚に関連して、今回は『19歳の純情』(1話30分、167話)をご紹介します。登場するのは、中国・延辺からやってきた朝鮮族の少女グッカ、グッカとの結婚直前に事故で亡くなってしまった男性の家族ホン一家、グッカの明るさと率直さに心惹かれ温かい人間に変わる男性ユヌの家族バク一家。グッカとユヌの出会いから結婚までを中心に、2つの家族それぞれに起きるトラブルや恋、心に抱えた痛みを乗り越える姿を、いねいに描いている爽やかなドラマです。とくに、洋服職人のおじいさんを中心とした素朴で伝統的な暮らしぶりのホン一家と、IT企業CEOの父、韓国料理研究家で見栄っ張りな母、親に反発して駆け落ち結婚した姉、失業し専業主夫に

なる料理上手の義兄、美容と服装にしか興味のない「お嬢様」の妹など、現代的なユヌの家族との対比も、急激に変化している韓国社会の課題と「家族とは何か」を投げかけています。

見所はなんといってもグッカの明るさ。結婚に胸躍らせてやってきたのに相手は亡くなっていて、見知らぬ国で取り残され、道端の卵売りやサウナの掃除の仕事でひとり生活を始め、文化や風習の違いからトラブルに巻き込まれても、常に自分を励ましながら生きていく少女の描き方には、朝鮮族という同胞への国民の思いがあるように感じます。

この朝鮮族というのは中国・吉林省周辺に暮らす朝鮮民族(中国では少数民族朝鮮族自治州となっている)のことで、中韓国交回復以降、発展した韓国・韓国にたくさんの人たちが働きに来ています。もともと、19世紀後半から自然災害などによって鴨緑江を渡り移住した人たちはいましたが、最も多くは日本による収奪で朝鮮の土地を失い流れていった農民や、満州国建設のために強制移住させられ、戦後も南北分断などにより帰る機会を失って定住した人びとです。この歴史も意識して、ご覧になってください。

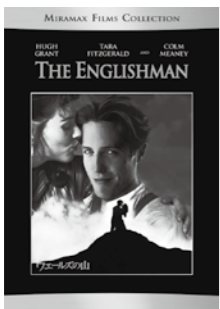
04

Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい?

02

『ウェールズの山』 (1995年、イギリス)
【監督】クリストファー・マンガー 【出演】ヒュー・グラント、タラ・フィッツジェラルド

重政 栄一郎 / しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー



『ウェールズの山』
発売元: ウォルト・ディズニー・スタジオ・ホーム・エンターテインメント
価格: 1,500円(税込)

第一次世界大戦下、1917年のとある日、南ウェールズのどこかで美しい村に2人のイングリランド人が現れる。彼らは地図作製のための測量隊。この村自慢の「山」(フュノン・ガルウ)の標高を測量したところ、「山」と判定するには6mほど低く、「丘」と判定される。郷土の誇りを傷つけられ憤慨した村人たちはこそつて「丘」を「山」にかさ上げすべく、頂上に盛り土を運び始める……。

村人たちの「郷土愛」を巡る奮闘をコミカルに描いた「心暖まる感動作」であるが、そこは括弧付きだ。他所者には何い知ることのできないウェールズとイングリランドの根深い軋轢や戦時下という社会情勢を背景に村人たちは文字通り「一丸」となる。「ウェールズ人の魂」の名のもとに村人全員の心を糾合し、支配する力は絶大であり、絶対的である。後ろ向き意見を吐けば「国賊」呼ばわりされ、怠け者や非協力者に

は「お前のせいで失敗したら……」と脅し文句が投げつけられる。互いが互いを監視し、異論は一切許されぬ。まさに総動員態勢である。目的のためとあらば、嘘も不正行為(「犯罪行為」)も色仕掛けもまかり通る。その旗を振るのは、牧師ジョーンズ。聖職者の彼ですら犯罪に手を染める。ただ一人、小学校教師デービスが異を唱える。彼は、牧師ジョーンズが小学生をも使役するために学校にやって来ると「高さをこまかすために……子どもを動かせるのか」と拒否する。また、村人たちが校庭の芝生を剥がし始めるも猛烈に抗議する。そんな彼を牧師ジョーンズは「共同意識も言語感覚も欠けている」と罵り、村人たちは「お前はイングリランド人か!」と嘲笑、無視する。劇中の彼の役回りはいくまで空気の読めない愚かな「道化者」である。

登場人物の言動やストーリーを鑑みると、この映画の制作者は本当に邪気など毛頭無いように思われる。しかしこの無邪気さ、そして「愛」やら「正義」こそが全体主義の源泉だ。それはやがて人びとを内と外に分け隔て、外に向けては差別、内に向かつては統制となって溢れ出す。「感動」のエンディングに、もちろん小学校教師デービスの姿はない。

しらたか 更り

02

新野 祐子 / にいの・ゆうこ
しらたかノラの会



蒸して冷ました大豆と米麴をあわせる。

しらたかノラの会の商品が買えます。お問合せ先0238・85・5675(めくり屋内)

鼻孔に染み込んだ煮豆のにおいが夢の中までついてくる夜は、これで何度目だろうか。そう、私たちの味噌造りが啓蟄を迎え始まったのだ。作業場『ゆうゆう舎』(しばしばバタバタ舎と呼ばれる)の二階に、代表の大内さんが3年前に麴室を作った。以来、今の季節は米を蒸し大豆を煮る匂いが辺り一面に漂う。

今年の仕込み量は約1トン。原材料の米は会員や友人の減農薬栽培。大豆は会の共同畑の無農薬栽培のものを使い、塩は赤穂の天塩だ。作り方を簡単に紹介しよう。1日目、朝、前日研いでおいた米を蒸し、麴菌をまぶし麴室に入れて保温する。夕方、米をバラバラにほぐし麴菌の回りをよくする。2日目、朝、再び米をほぐし、苗箱に盛り込む。これ

味噌は私たちの製品の中で、自信を持って勧めるもの一つだ。なぜそんなに自信が、と言えば、麴には専門家のお墨付きをいただいたからである。以前属していた農産加工グループで私が麴の担当をしていたとき、麴菌では最大手の今野もやし商店に麴を送り、見てもらった。「麴屋さん、味噌屋さんでは、なかなかつくれないような立派な麴」という評価で、一同大喜びしたものだ。同グループだった当会の加藤さんの長年の試行錯誤の上に確立した方法を私たちはより改善し用いている。何事も地道な努力と経験だ。

味噌造る 湯気の真中の 笑い皺

一村が白鳥帰る 声の中

を重ね保温し麴菌を繁殖させる。夕方、室内温度を上げ苗箱をレンガ積みにする。3日目、朝、麴が出来上がり、ほぐして塩を混ぜる。午後、柔らかく煮た大豆と合わせてミンチ機にかけ桶に仕込む。7月に転地返しをして、9月には食べられるようになる。わが会の美味しさの秘訣は仕込んだ時に少し加える種味噌(前年に作った味噌)だろうか。発酵が進み、ここならではの風味が引き継がれるのだ。

02

むら歩き ⑧

大野 和興 / おおの・かずお
農業ジャーナリスト、本誌編集長



クスクスを作る女たち。

クスクスを作る難民キャンプの女たち

土壁がどこどころ崩れた年代物の建物に案内された。中に入ると、白衣を着た中年の女たちが大勢忙しく働き、クスクスを作っている。土間にあぐらをかくようにどっかりと座り、粉をこねる女たちは全員この地域にある難民キャンプのクスクス生産組合のメンバーだ。パレスチナでは人びとのあらゆる活動がイスラエルの占領と重なる。

その加工施設は地元NGO、PARCの農産加工施設のひとつ。西岸地区の中心都市ラマラから東に向かい、ジェリコの郊外にある。昨年まではここはナツメヤシの実の選別と箱詰め工場だった。それが近代的な選別機の導入に伴いよそに移転、その後女たちの働き場となった。

女たちはそれまでは難民キャンプの中で集まり、作業をしていた。1948年、欧米の後ろ盾を得てこの地に建国したイスラエルは、531ヶ所の村と町を破壊して住民を追放、72万6000人がヨルダン川西岸とガザなどに避難、難民キャンプをつくった。その後も続く占領地域の拡大や土地接収で、生活と生産の場を奪われる人たちが増え続けた。

難民生活は世代を越えて続き、生存の基盤を失った結果として貧困層が多い。この加工場で働く女たちの多くは夫を失った人たちで、クスクスの食材加工で得る収入が主な収入源となっている。

クスクスというのは家庭料理で、通常は家で作り肉やスープに入れて食べる。小麦粉をこね、時間をかけて指でひねり、米粒ほどの粒にする。その様子は練達のそば職人のふるまいを想起させる。

粒は15分ほど蒸し、乾燥させる。それを共同作業することで商品化し、収入源に育てた。PARCはその女たちの活動を助け、より精密な乾燥や選別の施設を用意し、販売先を開拓。訪れたこの日はイタリア向けの製品が作られていた。パレスチナでは小麦はあまり生産されておらず輸入されているが、ここで使う小麦粉は地元産をと生産も始めている。

PARC:パレスチナ農業復興委員会

今回のお題 大学で通販生活

レポーター
阿部環 / あべ・たまき
恵泉女学園大学 教務課職員



「ポコポツ、今朝もコーヒーのいい香りが部屋にひろがります。今日のコーヒーはルワンダです。恵泉女学園大学人間社会学部研究室でAPLAショップのコーヒーを淹れはじめて、早いもので3年目になりました。コーヒー好きの先生方の「おいしいコーヒーが飲みたいね」、「せっかく飲むならどこかで役に立つことのできるコーヒーがいい

ね」ということで始まったこの研究室のコーヒー。先生も学生も職員もみんなカップ一杯50円、大きいカップも小さいカップも値段は同じ、自分にあった大きさのマイカップで飲むことができます。いい香りに誘われて、「家でも飲んでみたい」の声にこたえ、粉の販売も始めました。そしてこの収益でまたコーヒーを購入しています。

最初の頃は、ここで飲んでいるのかなあ、と遠慮がちだった学生もだんだんと来てくれるようになりました。授業の間のほっと一息の一杯や、今日は課題のレポートを書き上げるのに眠気を覚ましてがんばるぞー！の一杯など理由はさまざまですが、寛いでくれている様子を見るところれしくなります。

コーヒーの販売につられるように学部研究室では、大学の体験学習プログラム先のタイの村や民間団体から学生たちが購入したフェアトレード商品(布やバッグ、ポーチ、アクセサリなど種類多です)や、食育について学んでいるゼミの学生たちが取り寄せ



コーヒーを片手に弾む会話。

ている食品(お茶、スープ、寒天製品や砂糖など)、それから先生の研究フィールドのフィリピンやタイのストリートチルドレンの子どもたちが作ったバッグなどを販売しています。

学部研究室へ来てコーヒーを飲んだついでに、「コーヒーや品物について、「これどうしたの?」、「何に使うの?」、「おもしろいね」などと興味を持ってくれることは学びのきっかけです。さらにどんな人が作っているのかとか、これらの国々はどんなところだろうとかを考えることで

さらに学びたい気持ちがぐくぐくと膨らんでくるのではないのでしょうか。それで品物を買ってくれたら、ほんの少しずつですが、また新しく仕入れて利益をそこに還元できるので、さあ、今日もコーヒー飲んで、リフレッシュして自分ができること考えよう!



研究室で販売しているフェアトレードグッズ。



コーヒー1カップ50円で販売しています。



1	2
3	
4	

- 1 — イギリス統治時代の建物。ラクナウ駅。思い描いていたインドのイメージとは違ってヨーロッパを彷彿させる建物でした。
- 2 — 服を着た犬を発見。そこから同じ顔した野良犬たちがいる中でなんだか不思議な存在でした。
- 3 — どんなに年齢を重ねても、色鮮やかなサリーやストールをセンスよく着こなしているインド人女性たち(この方は控えめですが)。
- 4 — 横入り当たり前前の駅では頑張って自分から突っ込んでいかないと切符なんて絶対買えなかったのに、ここではインド人のみなさんも列をなしていました。何を求めて並んでいたかは忘れてしまいましたが…。

(2010年1月撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容◎アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

編集後記

今回の特集に掲載したセカンドハーベスト・ジャパンさんの取材。現場を見せていただき、紙面では書ききれないことをたくさん感じました。本当は自分たちが作ったものを届けたいのに捨てなくてはならない食品を提供する側の企業の人たちの思い。配達先の様々な支援先が直面している現実。両者をつなぐ交流などもセカンドハーベストさんは行っています。おもしろいと思ったのは、出荷しきれない野菜があるという農家さんがいて、ボランティアの人たちで収穫のお手伝いに行き、その野菜を支援先へお届けすることもやっているそう。そうやって色々なつながりができているということも感じました。(吉澤)

ネグロスツアーで10年ぶりにネグロスを訪問しましたが、実はそのほとんどが初めて訪れる場所。とはいえKF-RCの開所式では、2年ぶり、10年ぶりに会う人、あなたがあの…!なんて人にも会え、KF-RCを取り巻く今後の展開がまたさらに楽しみになりました。取材でお世話になった村上園さんからはお茶の木を譲っていただきました。APLAの事務所にも置いていますが、うちのベランダでも1本育てています。お陰さまで、朝、カーテンを開ける癖がつかえました。思わぬ効果にいとおしきが増す一方です。(松田)

ハリナ HALINA

2010年春号 vol.02-no.08
2010年5月1日発行

【編集長】
大野和興

【編集者】
吉澤真満子、松田麻衣子

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぶら: Alternative Peoples Linkage in Asia)

〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

【印刷】
株式会社セイズ

APLA web siteでは、本誌に掲載されている写真の一部をカラーでご覧いただけます。
http://www.apla.jp/05/05_halina.html

事務局の動き(2010年2月～2010年4月)	
2月 1日	ドゥコープ平和募金報告会&09年度募金贈呈式に吉澤が参加しました。
2月 1日	ハイチ地震被害・災害支援募金の呼びかけを行いました(6月15日まで受付)。
2月 4日	学芸大学付属高校社会科見学実習において、APLA/あぶらの活動について吉澤が話をしました。
2月 5日	法政第二高校の学生にAPLA/あぶらの活動について吉澤が取材を受けました。
2月 6日	APLA理事会・評議委員会開催。
2月 8日	地球の木の皆さんとランゴンバナナの国内物流現場(港、パッキングセンター)を松田が視察しました。
2月 14日	イベント『Spicy Valentines 2010』を北のハチドリ、Slow Water Caféと共催で開催しました。
2月 18日～24日	恵泉女学園大学のスタティツアーがネグロス島で行われ、大橋が同行しました。
2月 20日	ピーブルズ・ブラン研究所のオルタキャンパスOPENにて、吉澤がAPLA/あぶらの活動を話をしました。
2月 22日～26日	株式会社匠集団そらが、BMW技術を導入するためフィリピン・ネグロス島カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)を訪れました。
3月 3日～6日	インドネシア・スラバヤにてATINA社と共催で石けんセミナーを行い、フォーラム・アソシエの大嶋朝香さんとAPLA理事廣瀬康代さんに講師を務めていただきました。
3月 18日～24日	株式会社匠集団そらに、フィリピン・北部ルソンのBMWプラントの定期モニタリングと、ネグロス島カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)に建設中のBMWプラントの調整をお願いしました。
3月 19日～24日	『新たなネグロスと出会うツアー』を開催し、6名の参加がありました。
3月 22日	カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)の開所式が、フィリピン・ネグロス島で行われました。
3月 22日	パルシステム東京平和カンパ贈呈式に、APLA会員(ATJ広報室)の小林和夫さんに出席してもらいました。
3月 25日～29日	CORDEVの第3回総会出席のため、吉澤と松田でフィリピン・北部ルソンへ出張しました。
4月 10日	ちえのわハウスのイベントに吉澤が参加しました。
4月 17日、18日	Earthday Tokyo 2010にATJと共同で出店しました。
4月 22日	『APLA/あぶら 公開講座・農と食を考える』第1回目を開催しました。
4月 24日	APLA理事会開催。

事務局からお知らせ

APLA / あぶら 公開講座・農と食を考えるが始まりました。

〈グローバル化と農〉、〈日本の農と食の現場〉、〈むらとまちをつなぐ〉という3本のテーマのもと、市民・民衆の経済や民衆交易がこれから何をめざすべきかについて考え、それらを踏まえた社会運動の可能性や課題についても討論していきます。多彩な講師陣をお迎えしての全11回、みなさんのご参加をお待ちしています。

会 場：新宿コスミックセンター3F大会議室、または小会議室
参加費：700円(APLA会員500円)

※参加ご希望の方はAPLA事務局まで、お名前・ご住所・Eメールアドレス・電話番号をお知らせください。
※詳細は、ホームページをご覧ください。 <http://www.apla.jp/event.html>

5月22日はAPLA第3回総会です。ぜひご参加ください。

総会の後には同会場で、山本宗補さんのスライドトークショー及び小向定さんのミニライブ♪を企画しています。
詳細はハリナ裏面をご覧ください。

APLAでは会員さんへメールマガジンを配信しています。

APLA会員限定のメールマガジンを不定期に流しています。

From Negros, Philippines【ネグロスより】

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)の開所式が行われました。

前号ハリナ7号のTopicsのコーナーでお伝えしたフィリピン・ネグロス島で新たに動き始めた農民学校と若者の実践農場。カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)として再出発するのに合わせて、様々な関係者が一同に集い、新たな門出を祝いました。

開所式には、このKF-RCの立ち上げに関わった農民グループNBAのメンバーたちと青年部、日本からは、時期を合わせて訪問したAPLAツアーの参加者6名やAPLA共同代表の秋山氏、疋田氏、(株)オルター・トレード・ジャパン(ATJ)の堀田社長、(株)匠集団そらの秋山氏が参加。ネグロス島からは、マスコパド糖やランゴンバナナの民衆交易を行うオルター・トレード社(ATC)の方たちや生産者代表、近隣の小学校の先生たち、村長、KF-RCの農民学校に協力してくれている方たちなど総勢約110名が集まりお祝いしました。新しく建設したセミナーハウス、BMW(パクテリア・ミネラル・ウォーター)やバイオガスのプラント、研修生たちの畑、豚舎などを見てまわり、今後KF-RCでどんなことを実現していきたいかを参加した皆さんに説明しました。

式の最後にはAPLA共同代表の秋山氏が挨拶をし、「20数年前ネグロス島には砂糖キビ農園労働者はい



新しい農場内を見学する参加者たち。

でも農民はいなかった。APLAの前身団体のJNCNの活動も含めて、砂糖キビ畑が広がるこのネグロスの地に自立した農民を生み出すという活動において、このKF-RCのような研修農場の構想は何も新しいものではなく、前からあったものだった。しかし、KF-RCはこの設立に携わった農民たち自身が

主体性を持ってやり始めたところ。大きな意義がある」と語りました。そしてまた、ここまで来るのに親たちが流した血と汗を決して忘れてはいけないと若者たちにメッセージを伝えました。これから活動が本格化するKF-RC。地域の未来を紡ぐたくさんの若者が巣立つ場所となり、またネグロスの農業の求心地となるよう、今後もAPLAはKF-RCをサポートしていきます。(APLA事務局長・吉澤真満子) ■

From East Timor【東ティモールより】

農村ワークショップの実施地を訪問

2009年8月、11月にかけて、パートナー団体のKSIとRDI(HAKADA)の協力のもと、潜在的なニーズの掘り起こしを目的とした「農村ワークショップ」を実施しました。このワークショップの報告を受け、2010年1月にそのフォローアップのために現地を訪問してきました。

ワークショップは、コーヒー生産地のエルメラ県ならびに非生産地のマヌファアヒ県やディリ市近郊の農村7村で実施され、各村の生産者組合メンバーを中心として合計200名ほどが参加。それぞれKSI/RDIスタッフのファシリテートで、地域におけるニーズ、これまでの組合活動やNGOなど外部からの支援の成果や問題点、地域の将来の目標とそれを達成するための具体的な道筋などが議論されました。その結果、どの地域でも道路・水道・電気などの基本的インフラ、教育や医療などの社会サービスといったニーズが何よりも高いことがわかりました。それらが重要なことは言うまでもありませんが、APLAが果たすべき役割は、具体的なモノやサービスを支援することではなく、「農を軸にした地域づくり」の実現やそのための経験交流の場をつくることです。どの地域で、どのような形で、人びとの自発的な活動をサポートできるのか。東ティモールの農村の現状把握や農民との直接的な意見交換を経て、現在APLAでは、今後の活動計画を立てています。

(APLA事務局・野川未央) ■



土地闘争について熱く語るレキシ地区の組合メンバー。